

戸崎 徹著『欧州共同体』（成文堂 一九八〇年 三一頁）

瀬 野 隆

- 一 『欧州共同体』への道
- 二 透徹した法的アプローチ
- 三 総合的視野
- 四 忠実な原典主義
- 五 期待される研究

一 『欧州共同体』への道

当著『欧州共同体』は本学政経学部教授である戸崎徹氏の数一〇年に及ぶ真摯な研究の成果である。防衛研修所において教官として主に中立論を研究されて来た著者は、その立場から国際経済学に安全保障的要素を加味した著者独自の独創的な国際経済学を完成させたのである。一九七一年九月一〇日に成文堂から出版された『国際経済論講義』

戸崎 徹著『欧州共同体』（瀬 野）

は同七四年七月二〇日に多少の修正を加えて第二版が、さらに同八〇年三月一〇日には改訂増補の第二版が発行されているが、当著はこの欧州共同体研究の端緒となるもので、理論と政策を結合しこれをベースに現実の諸問題を解釈し解決に迫ろうとするものであった。<sup>①</sup>

著者のこのような研究態度は一九七二年六月二五日に出版された同氏の「国際経済上におけるスイスの地位」（国士館大学政経学会編『政経論叢』第一六号）という論文においても一貫しており、スイスの中立と国際関係、スイスと国際関係機関、スイスと国際貿易、国際資本市場としてのスイスを論じた当論文ではスイスが Europe in Miniature であり Prefiguration of Europe of the future とされている。<sup>②</sup>ここに今日の著者のEC研究の萌芽がみられたその鋭い洞察力が感じられるのである。中立国を典型的な国家モデルとした政治的・経済的・軍事的な国際関係論的研究はやがて一九七三年一月一五日に発行された「国際通貨体制と国際関係」（国士館大学政経学会編『政経論叢』第一九・二〇合併号 柴田徳次郎総長追悼記念）においてより一層の充実と展開をみせ、そこには国際通貨体制の動揺が単に為替平価や国際決済手段の選択および制度上の変更だけの問題ではなく、広く米ソ欧のバランスの問題として論じられている。<sup>③</sup>当論文はブレトン・ウッズ協定の成立と米英関係、冷戦の展開と国際通貨体制、ドルの地位の変遷とドル防衛、金ドル本位制の崩壊と国際関係に言及するもので、後の欧州通貨同盟創設への歴史的必然性を最も簡明に引き出している。

米ソ二大強国に対して自国の自主独立を維持しようという動きは西欧諸国の今日における普遍的なパターンであるが、かつての強国が今日からうじて中立を維持している例としてのオーストリアの研究はオーストリアに関する書籍及び資料のわが国における入手難と稀少さにもかかわらず、この傾向をいっそう明確かつドラマチックに解明した労

作である。これは一九七四年一月二五日に発行された「オーストリア共和国の経済と国際関係」（国士館大学政経学会編『政経論叢』第二一号）において論述されたもので、オーストリアの第一共和国の時代 その一（一九一八—一九二九）、同 その二（一九三〇—一九三八）、第二共和国の時代 その一（一九四五—一九五五）、同 その二（一九五五—）を内容とするものである。前述のスイスとこのオーストリアに関する研究は両国が歴史的には対照的な存在であるかのようなものであるが、その意味するところは一国の独立と安全保障がいかに現実困難でありながら、なおかつ多大の犠牲を払ってでも確保されなければならないかを、またそれが国家存立の永遠の政策目標であるかを論じているのである。

スイスとオーストリアについての中立論の展開と米ソの強大国のはざままで動揺する西欧諸国を論じた国際通貨体制論は一九七六年五月二〇日に成文堂から出版された『欧州共同体（EC）の形成と展開』に集約されることとなった。当時のEC研究が将来をバラ色に論ずる傾向が強かったが当著者はEC内部の対立と石油危機がECの将来に大きな試練となるであろうと見通していた。<sup>④</sup>それは共同体の成立、統合日程および主要機関、過渡期間における共同体の展開など、一九七〇年代における共同体に関する研究であった。しかしながら残された問題もいくつかあり、それは西欧の安全保障問題であって、日本におけるEC研究が主として経済的側面に限定されていることからくるアンバランスを著者はここで修正したのである。それは一九七八年三月二〇日に出版された著者の「欧州共同体と西欧の安全保障」（防衛学会編『新防衛論集』第五巻第四号 朝雲新聞社 一九七八年）であって、ここで著者は一九七六年一月に発行されたティンデマンズ報告における安全保障問題をECにおける一つの重要なファクターとしてとりあげて論じている。<sup>⑤</sup>当論文と先の著書とはその後の「共同体と第三世界」の論文とともに一九八〇年四月一〇日に成文堂

から発刊された『欧州共同体』に一括編集されて大著三一―ページにのぼるEC論が誕生したのである。

戸崎徹教授は序文において非常にひかえめかつ意味深長に「本書においては、経済的な、あまりに経済的な（Ökonomisches, Allzuökonomisches）共同体がどのように形成され、どのような過程をたどってきたかを正確に跡づけることに主眼をおき、あわせて可能なかぎり共同体の対外関係の展開について考察を加えることにしたい」とのべているが、その完成への道程は数一〇年にわたる孤独で冷厳な資料分析と広範で徹底した思考と大国的及び小国的発想を極力排除した中立論的立場から国家及び地域あるいは世界の安全と発展に注目する著者の総合的視野の行程であって単に経済学的側面にのみとらわれない現実的でアカデミックな研究そのものであった。

## 二 透徹した法的アプローチ

当初ECの研究は幾分ジャーナリスティックな傾向が強かったが、今日ではようやくその域を脱し専門的分野を確実におさえた研究が多く見られるようになってきている。日本国際政治学会や国際経済学会でも常時主要なテーマとなっている点からも、このことは裏付けられる。たとえば柴田幹夫著『欧州共同体の経済政策』<sup>⑧</sup>、細谷千博、南義清共編『欧州共同体（EC）の研究——政治力学の分析——』<sup>⑨</sup>、清水嘉治著『現代ヨーロッパ経済論』<sup>⑩</sup>、片山謙二編著の『ECの発展と欧州統合』<sup>⑪</sup>などは最近における主要なEC研究書としてあげられる。しかしながら戸崎教授のEC論はその研究の当初からローマ条約を徹底的に研究し、逐条的に一つ一つを丹念に確認する作業をもって自らの論文作成の基本的アプローチとしたのである。このような作業は峻厳な自己規制と卓越した法的思考能力と確実な語学力を

必須の条件とし、さらに法的解釈能力を十二分に発揮できなければ継続することすら困難である。そしてこのような作業を主とする法的アプローチは日本のEC研究において相当遅れていた。最近になってこうしたアプローチが見直され、とり入れられるようになったが、この意味から戸崎教授のEC論はその先駆であったといえる。

具体的な法的アプローチとしては、当著の第一章共同体の成立、統合日程および主要機関についてはそれが最も端的に表現されたものである。そしてこのアプローチが更に効果的に行なわれたのは第四章 共同体と第三世界についての研究である。ここではローマ条約の分析から着手して各条文の特徴を比較対照し、それらを分類し、第三世界との連合の萌芽を確認するとともにヤウンデ協定、アルーシャ協定及びロメ協定との対応あるいは矛盾を明確にするという極めてユニークかつ詳細で基本的な法文解釈が行なわれている。すなわちローマ条約の第三条（K）の規定を開発政策の萌芽として認め、この原則的规定に関連して連合は条約第四部（第一三一条―第一三六条）にもとづくものと条約第二三八条の規定にもとづくものに大別され、共同体の発足当初においてはフランスおよびベルギーとの特別の関係を有する領域と共同体との間に条約第四部の規定にもとづく連合が成立していたにすぎなかったのであるとする。そして条約第四部の規定及び条約付属の実施協定にもとづく連合——これをいま連合の第一の範疇とよぶ——は条約付属書IVに掲げられた加盟各国と特別の関係を有するOCT（Overseas Countries and Territories）を対象としたものであり、したがって法形式的にみるならば——共同体の裁判所が指摘しているように——政治的に独立したのちOCTは条約第四部にもとづく連合規定の利益を享受する資格を失ったものとみなされるべきであるとする<sup>⑬</sup>。他方、条約第二三八条の規定にもとづく連合は、条約第四部の規定にもとづく連合に対していわば連合の第二の範疇とよぶことができるであろうとし、前者が加盟各国の名において協定が締結されるのに対し、後者の場合には共同体の

名において協定が締結されていることは両者の基本的な相違の一つである。共同体と加盟各国の両者の名において締結された第一・第二次ヤウンデ協定、ロメ協定等がいずれの範疇に属するものであるかという問題が生ずるが、これらの協定がいわゆる混合協定の形式をとっているのは協定に含まれている金融援助や輸出所得保証等の一方的義務が共同体の権限を越えるのではないかという疑問を回避するためであって、これらの協定が法形式的には第二三八条の規定にもとづくものと解するのが正しいとしても、実質的には条約第四部の規定にもとづく連合の歴史的発展形態とみるべきものであるとする著者の指摘は、法的アプローチの鋭い分析力によるものである。

### 三 総合的視野

EC研究は今日までのところ経済学や政治学の個別の学門分野で論じられる傾向が強かったのであるが、最近の傾向としてこれは欧州そのものを全体的な研究対象としなければ十分な理解に及ばないという反省が行なわれている。<sup>⑮</sup>そのために経済学・政治学・法学から地政学にまで及ぶ広範な研究が行なわれ、さらには欧州の安全保障及び軍事的側面からの研究の必要がさげばはじめた。それには経済学者・政治学者・法学者および軍事専門家の総合共同研究が必要とされる。しかしより理想的な研究はこの種の論文において右のような専門的能力の全てを一著書が兼備することである。その意味で戸崎徹教授はこれらの専門的能力を保持するとともに、その実務にも相当精通されている点を考慮すれば、この分野の研究において最適の人材であるといえる。

著者のECに対する基本的な視点は次のような主張にみることができる。それは「第二次大戦後のヨーロッパにおける最大の潮流となった integration への動向は、大戦後の結果世界史の舞台におけるヨーロッパ諸国の地位が顕著な変化をとげたという歴史的事実を背景として生じたものであった。近代兵器を用いた大規模な正規戦からレジスタンス運動のゲリラ戦までを含む総力戦の舞台となり、無残な荒廃状態で戦後の日を迎えたヨーロッパ諸国には、もはや単独で自国を復興する能力はほとんど残されていなかった。それに加えて、戦勝国のなから対立する二つの超大国 (Supermacht) が荒廃にあえぐヨーロッパ諸国の前に圧倒的な力をもって立ちふさがった。こうした事態に直面したヨーロッパ諸国にとっては、長年にわたる相互間の対立と不信の禍根を絶ち、共同の努力によって第三勢力 (third force) としての地位をきづきあげ、Supermacht に対抗する態勢をととのえることが焦眉の急であった」という言及である。

著者の総合的判断を最もよく表現するものは当著の二四七ページから始まる第三章 共同体と西欧の安全保障についての論述である。それは七六年一月に発表されたティンデマンズ報告の中から、欧州同盟の対外関係の形成に際して生ずる基本的な重要問題としてとりあげられた(ア)新たな経済秩序、(イ)欧米関係、(ウ)安全保障、(エ)ヨーロッパ周辺地域における危機の四項目のうち、とくに(ウ)の安全保障に対するもので、「もし加盟各国が共同の運命に身を委ねるとするならば、そのことから必然的にいずれかの加盟国の安全が他の加盟国の安全と分かち難く結びつくという結果が生ずることになり、したがって加盟各国は欧州同盟の漸進的形成に際して安全保障との関連において生ずる諸問題を解決しなければならぬのであって、共同体が共通防衛政策 (Gemeinsame Verteidigungspolitik) を持たないかぎり欧州同盟が完成することはありえないであろう」というティンデマンズの報告の言葉をもってその重要性を強調している点である。<sup>⑯</sup>このようなティンデマンズ報告における指摘は残念ながらわが国のEC研究者の中であまりなされてい

ないしあるいは見落とされているのである。実際、一九七一年に発足した経済・通貨同盟 (Wirtschafts- und Währungsunion) が相次ぐ国際通貨危機に直面して混乱の度を深め、イギリス、デンマーク、アイルランド三国の加盟に伴って域内の社会・経済的諸問題が深刻化していったばかりでなく、七三年秋に発生した石油危機に際して内部的な矛盾と加盟国間の軋轢が一挙に露呈して統合の危機に立たされていた共同体にとって、著しい変貌を遂げつつある国際情勢下において自主独立の統合体としての地位を強化しかつ完成して行くためには、新たな長期的視野に立っての統合の路線を再検討することが *sine qua non* (必要条件) となったからであると、著者は判断するのである。このような分析は第四章 共同体と第三世界についての論説においてもみられ、とくに共同体の共通地中海政策は単なる経済的要因だけでなく「これら諸国と共同体との将来の関係は政治、経済、軍事その他のすべての分野にわたるグローバルな諸条件によって規定されることになるであろう」と看破しているが、それはEC委員会の一九七一年七月二七日と翌七二年二月二日の二回にわたる地中海地域の安全についてのメモランダムにもとづくものであった。

ここで当著の最大の特色について論じておきたい。それはある意味では「誰も書かなかったEC論」であるということである。ECを安全保障論的にふれた著作は幾つかあるが、欧州の安全保障そのものをECの枠組の中で展開し、それをEDC構想から説き明かし、その原因を追求しながらNATOとWPとの間でEECがECに発展するプロセスを明確にし、こうしたNATO加盟国 (アイルランドを除く) によって構成されるECの覆合 (Deckung) 関係がもたらす深刻な内部事情に踏み込んだ研究はほとんどない。そこには米ソの変化する戦略の中で、CSCEに共同体が一つの声 (eine Stimme) として登場し、ソ連および東欧諸国から国際社会における実在として承認を受けるに至ったことは、著者のいうように西欧の将来に希望を与える一条の曙光であったといえる。しかしながらまた著者はいわ

ゆるドイツ問題 (deutsche Frage) が国境関係のほかに将来のドイツの国家構造、国際政治上および軍事上のステイタス等の複雑な要素を包蔵しているにもかかわらず、CSCEがこれを放置し、相互の兵力ポテンシャルを中立化するための真剣な軍事努力を怠るならば、ソ連の巧妙な外交戦略によって中央ヨーロッパ地域——特に西ドイツ——のフィンランド化 (Finlandisation) の危険が増大することになろうと主張する。<sup>②④</sup> ここには著者の総合的視野が本書の特色として欧州の安全保障問題に収斂されて行くプロセスをみることができるといえる。

#### 四 忠実な原典主義

EC研究書の中で、もう一つの特色をもつものとして本書を挙げるのは、その極めて厳格な原典主義である。それは Treaties establishing the European Communities を英・独・仏及び邦訳をそれぞれ対照しながら、克明に条文の表現とその語句の意味するものを追求し、少しでも不明なところがあったり、矛盾が存在すれば大冊で詳細な検討を行ないつつは Hans Smit and Peter E. Herzog の The Law of The European Economic Community——A Commentary on The EEC Treaty——によって確認し、またこれも同様の大冊である Hans von der Groeben, Hans von Boeckh und Jochen Thiesing の Kommentar zum EWG-Vertrag を参照にするという厳格な検証が行なわれている点である。この作業は他のあらゆる条約・協定に及んで行なわれている。また各項目に関しては Bulletin や the courier Commission の報告書、あるいは Official Journal, EC Background Report, European Documentation, General Report, Information を徹底的に利用する等の方法がとられており、この作業は一項目について数種の資料

を求めて相互につけあわせをした上で確認するという方法で行なわれている。したがって、その資料はおそらく膨大な量ののぼるものと思われる。

また原典に準ずるものとしての著書については基本的なEC論であるWalter HallsteinのUnited Europe、イギリスの立場から論じた小冊のDennis SwannのThe Economics of the Common Market, André MarchalのL'Europe Solidaire, Andreas Sattlerの小冊であるが重要な研究書である。Die Europäische Gemeinschaften an der Schwelle zur Wirtschafts- und Währungsunion, 1962, Bela BalassaのThe theory of economic integration等が第一章での基本的な参考図書となっている。第二章では理事会決定や委員会の提案およびメモランダム等のEC内部の原資料が用いられている。また各種の協定を原典とする説明がなされている。著書としてはSimon HausbergerのEuropäische Integration, Frank Doppe (Hg.)のEuropäische Wirtschaftsgemeinschaft, Jörg TahlmanのDie erloschene Gestaltungskraft, 等が使用されている。第三章ではManfred WegnerのWirtschafts- und Währungsunion—Ziele und Wege, 1964, Walter Stockの小冊であるが重要な参考書である。Die europäische Wirtschafts- und Währungsunion, Hans WillgerodtのWege und Irrwege zur europäischen Währungsunion, Beate Kohler und Gert SchlaegerのWirtschafts- und Währungsunion für Europa, イギリスのEC加盟をとり扱ったものとしての重要なSimon Z. YoungのTerms of Entry, David SpanierのEngland—zielstrebig ohne Begeisterung, 1962, Jörg TahlmanのDie erloschene Gestaltungskraft, や石油危機に関して論述した白表紙のHans R. KrämerのDie Europäische Gemeinschaft und die Ölkrise, Manfred HolthusのEuropäische Integration zwischen Solidarität und Zweitracht, Haasn—Eckart ScharrerのEuropäische Währungspolitik von dem Hinterland der internationalen Ölpreisexlosion,

Klaus Köhler ⊗ Die Kehrseite des Gemeinsamen Agrarmarktes, Alexander Nördlinger ⊗ Konfliktbereiche der  
Gemeinsamen Agrarpolitik, ㄱㅇㅇㅇ Jörg Thalmann ⊗ Die erloschene Gestaltungskraft ㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇ ㄱㅇㅇㅇㅇㅇ  
Community and the Third World, Rudolf Regul, Struktur und Perspektiven einer mitteleuropäischen Politik, ㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇ  
Handelsregelungen in den Abkommen der Europäischen Gemeinschaft mit den mittelmeerländern, Pius Okigbo ⊗  
Effects of the expanding european common market on developing countries, Gerhard Schiffer ⊗ Enlargement of  
the EEC and Community policies in the field of trade, Hans Broder Krohn ⊗ The enlarged Community and  
developing countries, Hams—Broder Krohn ⊗ Das Abkommen von Lomé zwischen der Europäischen Gemeinschaft  
und den AKP—Staaten, Charles van der Vaeren ⊗ Enlargement of the EEC and Community policies in the field  
of aid, C. Dadoo and R. Kuster ⊗ The road to Lome, Klaus Billerbeck ⊗ Stand und Perspektiven der  
Gemeinschaftlichen Entwicklungspolitik, Jacques Charbert ⊗ Wirtschaftsstruktur und Wirtschaftsentwicklung der  
Mittelmeerländer, Mahmoud Allaya ⊗ Die Arbeiterwanderung aus den Mittelmeerländer nach Europa, Rudolf  
Regul ⊗ Einführung und Zusammenfassung ㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇㅇ Tindemans Bericht ⊗ ㅇㅇㅇㅇ P. Hassner  
⊗ The New Europe, International Journal, XXVII, Klaus Nicder/Wichard Woyke ⊗ Internationale Beziehungen  
und Europäische Sicherheit, Johannes Steinhoff ⊗ Wohin treibt die NATO, Manfred Götemaker ⊗ Die Konferenz  
über Sicherheit und Zusammenarbeit in Europa, Maxwell Taylor ⊗ The uncertain Trumpet, Laurence Martin

① The Nixon Doctrine and Europe, The Defence of Europe, Herman Kahn ② On Escalation, André Beaufre ③ NATO and Europe, Walter Halstein ④ 大著 Die Europäische Gemeinschaft, Sir Bernard Burrows ⑤ Amerikanischer Atomschirm, NATO und europäische Verteidigungskooperation, Gustav Daniker ⑥ Strategie des Kleinstaats, Pertti Joenniemi ⑦ Truppened uierung in Europa, John C. Garnett ⑧ European Security and an Enlarged Community, Walter Scheel ⑨ Die politische Einigung Europas und das Gleichgewicht der Kräfte, W. F. K. Thompson ⑩ Der Stand der NATO—Streitkräfte im Kommandobereich Europa, NATO/Brief が用ゐられてゐる。

当著者の、このような原典主義、原書主義はECのことはECに聞くべきだと信ずる著者の考え方が強力に反映されているといえるであろう。可能な限り正確を期そうとする著者の執筆姿勢でもある。

## 五 期待される研究

戸崎徹著『欧州共同体』について世上の評価は主としてEC委員会代表部報道室長の岸上慎太郎氏によって幾度か紹介されている。たとえば当著の前著にも収録されている『欧州共同体（EC）の形成と展開』（成文堂）について岸上氏は昭和五十二年二月一日の日本経済新聞で「経済学者による基本書」としてA・T・マクリン著、名東孝二監訳『ECにおける企業と会計』（日本生産性本部）とともに「七六年の収穫であった」と高く評価している。またECジャーナルの一九八〇年二月号では「ECの開発政策について」戸崎教授自身のコメントを掲載し、「今日のE

研究の定本の一つともいえよう」とのべている。また前述の岸上氏によって、一九八〇年一〇月号の『ボイス』において当著をあげて「見逃せない」とし、「ECの全般的な理解、把握に極めて有益」であるとのべ、第四章「共同体と第三世界」では「ECの開発政策についてユニークな分析が試みられている」と評価している。さらに第五章では防衛学会会員である著書によって「ECと西欧防衛体制につき、初めての考察が行われた」と論じており、またECの最終目標である政治統合へ前進するためには、共同体が自らの安全保障に取り組みアメリカとの協調の下に西欧安全保障体制の再建に努めることが必須の条件である。とする著者の結論は「リアリティを持っている」としている。また『出版ニュース』の「わが著書を語る」では戸崎氏自らが「特に新しい試みとして、EDCの挫折以来共同体にとってアキレスの踵であり、政治統合への過程において避けて通ることのできない西ヨーロッパの安全保障の問題に論及した」と当著の特色をのべている。

右述のような当著に対する駐日EC委員会としての評価と著者自身の説明の他に、書評をする立場にある筆者の、本著に対する期待について論じてみたい。それはまず第一にEC研究はたとえば最近のソ連のアフガニスタンへの進攻やポーランド情勢によってECの安全保障が危機的状況をみせる可能性をもつ現在、終りのない研究である以上、この種の研究発表を継続していただきたいということである。第二に当面の問題として欧州通貨同盟の最近の動向を追加的に論じていただきたいことである。第三にできれば索引をつけて略語や重要語句を手早くみつけられるようにして戴きたい。

当著に対する書も大きな期待は前述のような希望の中で、欧州通貨同盟についてのフォローであろう。現在のところ短期的にはこの点での研究がまとまれば、当著の研究の一応の完成をみることになるであろう。また長期的にはこ

のEC論という同一テーマによって、数年ごとにその時々的重要課題をとりあげ論じることによって、当著そのものが日本におけるEC研究の原典として、より一層の学界への貢献となるであろう。

最後に「書を読むことはその人を論ずることである」といわれるが、学半ばの未熟な私のつたないこの書評が著書を正しく論じているかどうか、また不十分な論述に終始したのではないかと恐れるものである。

## 注

- ① 戸崎徹著『国際経済論講義』成文堂、一九七一年、四ページ。
- ② 戸崎徹著「国際経済上におけるスイスの地位」（国土館大学政経学会編『政経論叢』第一六号国土館大学政経学会、一九七二年）五三ページ。
- ③ 戸崎徹著「国際通貨体制と国際関係」（国土館大学政経学会編『政経論叢』第一九・二〇合併号、柴田徳次郎総長追悼記念、一九七三年）二二五ページ。
- ④ 戸崎徹著「オーストリア共和国の経済と国際関係」（国土館大学政経学会編『政経論叢』第二一号、一九七四年）五三ページ。
- ⑤ 戸崎徹著『欧州共同体（EC）の形成と展開』成文堂、一九七六年、三ページ。
- ⑥ 戸崎徹著「欧州共同体と西欧の安全保障」（防衛学会編『新防衛論集』第五卷第四号、朝雲新聞社、一九七八年）二二ページ。
- ⑦ 戸崎徹著『欧州共同体』成文堂、一九八〇年、三ページ。
- ⑧ 柴田幹夫著『欧州共同体の経済政策』通商業調査会
- ⑨ 細谷千博、南義清共編『欧州共同体（EC）の研究——政治力学の分析——』新有堂
- ⑩ 清水嘉治著『現代ヨーロッパ経済論』新評論。
- ⑪ 片山謙二編著『ECの発展と欧州統合』日本評論社。
- ⑫ 戸崎著、前掲書、一六三ページ。

- ⑬ 戸崎著、同書、一六七ページ。
- ⑭ 戸崎著、同書、一七一ページ。
- ⑮ この傾向は島野卓爾学習院大学教授を世話人とする東京の大学関係者のEC研究グループが、その研究会名を「EC研究会」から「ヨーロッパ研究会」に改名し、研究領域を拡大した点からも指摘することが出来る。ちなみに本学からは私の他に小倉取助教授と事務局長役の大庭治夫助教授がこの研究会に属している。

- ⑯ 戸崎著、前掲書、五ページ。
- ⑰ Tindemans Bericht 7. 1. 1976. S. 16 ff.
- ⑱ 戸崎著、同書、二四八ページ。
- ⑲ 戸崎著、同書、二四七ページ。
- ⑳ 戸崎著、同書、二二五ページ。
- ㉑ Das Memorandum der Kommission der EG über eine gemeinsame Politk der Zusammenarbeit mit den Entwicklungsländern によれば「共同体は地中海沿岸における敵性兵力の展開と石油供給の脅威に最大の注意を払い、地中海の連帯性の最大の分母である安全保障への要求を全地中海地域と分かちあっている」としている。
- ㉒ Conference on Security and Cooperation in Europe 欧州安保・協力会議
- ㉓ 戸崎著、前掲書、二六七ページ。
- ㉔ 戸崎著、同書、二六九ページ。